

ビアトリクス・ポターと日本

Beatrix Potter & Japan

河野 芳英・光藤 由美子

第1部

ビアトリクス・ポターの残した日本

ビアトリクス・ポターは、1866年7月ロンドン、サウスケンジントン、ポルトン・ガーデンズに生まれた。その出生年と場所は、多少なりとも、当時のジャポニズムの影響下にあったことが推察される。ジャポニズムは、一般的には1860年～1920年代、ヨーロッパ、特にフランスで起こった、日本の美術や文化を芸術の中に活かそうとする美術運動を指す。ゴッホが描いた浮世絵はよく知られているが、ビアトリクス・ポターが9歳の時に描いたスケッチに、浮世絵の模写がある。それは、11.5cm×14.5cmの小さいスケッチブックの隅に描かれ、ヴィクトリア・アルバート博物館のポターコレクションに保存されている。図1の模写は、1876年4月7日の日付があり、同ページには数本の花とともに素描されている。¹

ポター研究者のアイリーン・ウォーリィは、*Beatrix Potter: 1866-1943*の中で、“Also in this sketchbook are paintings of flowers and birds and, rather surprisingly, part of a Japanese print - a very fashionable object at that time.”²と述べている。しかしこれまで、ビアトリクス・ポターとジャポニズムについては、その研究の対象にはされてこなかった。ここでは、ビアトリ

1 この写真は、ヴィクトリア・アルバート博物館の許可を得て、'The Beatrix Potter Society Newsletter' 116, April 2010、p.9に掲載されたものである。

2 Judy Taylor, Joyce Irene Whalley, Anne Stevenson Hobbs and Elizabeth M Battrick, *Beatrix Potter 1866-1943 The Artist and her World* (London: The National Trust and F. Warne Co, 1995), p. 39.

クス・ポターとジャポニスムの関係について、ポターの作品や持ち物から考察していきたい。まず、そのために、その当時のロンドンにおけるジャポニスムやその後続く日本趣味ブームについて述べていく。

1 ロンドンにおけるジャポニスムや日本趣味

日本美術工芸品の本格的紹介は、1862年ロンドンで開催された万国博覧会に始まる。この博覧会では、初めて日本セクションができ、「ブロンズ、陶磁器、漆器、七宝など合計623点が出品された」³が、それは英国駐日総領事オールコックの収集品で、上記の美術工芸品ばかりか、提灯、草履、着物、傘など日本という異国の生活文化品の展示という特徴を持っていた。博覧会が閉会すると、美術館の他、東洋の品物を売る店が展示品を購入し、ロンドン市民の手に渡ることにもなった。このロンドン万国博覧会がヨーロッパにおけるジャポニスムの契機となり、その後、骨董店を通じて日本のものが輸入され、販売されていった。

イギリスにおけるジャポニスムは、フランスと異なり、ホイッスラーなどの唯美主義と関わっている。唯美主義は、美こそが絵画芸術の最大の目的であり、日本の美術品は、デザインのよさが人目を引いた。たとえば、日本の団扇は、比較的手に入れやすいものとして、中流階級の家を飾ることになった。図2の1869年『パンチ誌』の絵は、『美の交流－イギリスのジャポニスム』の「戯画にみられるジャポニスム」の中で紹介されているのだが、日本とは関係のない主題に、団扇が絵画作品のように壁に飾られている。⁴

絵画装飾芸術において、ジャポニスムは1860年代、一部の愛好家の範囲であったが、1870年代には、それが最高潮に達し、唯美主義運動とともに広がり、1880年代には、「芸術家や蒐集家にとどまることなく、さまざまな階層の人々を巻き込んだ幅広い現象」⁵となった。

3 小野文子著『美の交流：イギリスのジャポニスム』技報堂出版、2008年、p.8.

4 『美の交流：イギリスのジャポニスム』p.21.

5 同上、p.23.

1885年1月にオープンした日本人村博覧会は、ロンドン、ナイトブリッジで1887年6月まで、開かれた。その博覧会には、商店、茶店、劇場、仕事場、寺、住居があり、100人近くの日本人が住み、陶器、漆器、七宝、木彫り、象牙彫、はめ込み細工、提灯や扇子団扇作りなど手工芸の仕事ぶりを披露する他、ミュージカル「ミカド」を成功させた。入場者は、100万人を超えたと言われ、団扇や扇子などの竹製品、陶磁器、七宝、絵画は人気が高く、高価な根付などの象牙彫りも、日に5、6個売れたとある⁶。また大英博物館は、1873年から1880年に来日したウィリアム・アンダーソン（William Anderson, 1842-1900）が収集した中国や日本絵画や美術品約2～3千点を、その後大英博物館は、所蔵することになる。⁷

このような状況の中で、ポターは若い時に、父親とともにロンドンの美術館や骨董品店めぐりをしていたことを考え合わせると、日本美術品を目にしていただろうし、また家庭の中にも持ち込まれていたことが容易に推察される。

ポターは、暗号日記にサウスケンジントン博物館（後の、ヴィクトリア・アルバート博物館）や大英博物館へ度々訪れ、ロイヤル・アカデミーその他数多くのギャラリーで見た絵画評を書いているものの、日本絵画関連の記載はほんのわずかにあるにすぎない。そのひとつは、1890年、ロイヤル・アカデミー冬季展覧会に行った時、W・L・ウィリー（1851-1931）の絵画評の中に見られる。

The most original picture of the year is Wyllie' s Davy Jones' s Locker, but that he is said to have painted it from a diving bell I should have held incorrect. He has painted a perspective landscape under the sea, with a

6 Hugh Cortazzi *Japan in Late Victorian London: the Japanese native village in Knightsbridge and the Mikado* (London: Sainsbury Institute, 1885), p.16.

7 彬子女王「ウィリアム・アンダーソン・コレクション再考」『比較日本学研究センター研究年報』第4号、お茶の水女子大学比較日本学研究センター、2008年、p.123-132.

Spanish galleon in the distance. It is very poetic but not equal to the Japanese method of treating the subject.⁸

この 'the Japanese method' (日本の手法) とは、何を意味しているのか、それはおそらく、西洋の画家たちにとって新鮮に映ったであろう、日本画の自由な平面構成による空間表現のことと思われる。この暗号日記の記述から、ポターは、日本画を目にしていた以上に、その知識もあったとみられる。

2 ビアトリクス・ポターの描いた日本

初めに述べた、9歳の時の遊女浮世絵の模写を始め、日本のものが数点ポターの作品には、描かれている。図3は、1900年4月に描いた作品 'A Study in Reds' だが、団扇が背景に描かれている。⁹また、作品 "Shells and Seaweed drawn from nature"¹⁰ は、いつごろ描かれたのかははっきりしたことはわからないが、1905年に綴られた日記が編纂されている A Holiday Diary に収められており、そこに出版社の絵本担当であり、婚約者であった ノーマン・ウォーンの、姪ネリー・ウォーンにプレゼントされたと記載されている。貝殻や海藻とともに、小さく日本のおたふく (おかめ) の面が描かれている。¹⁰その他に、ヴィクトリア・アルバート博物館に所蔵されている作品 "Study of seashells, antlers and Japanese calendar" は、いつ描かれたのかわからないが、大きな貝殻数種と鹿の枝角の他に、本の背表紙のようなものに「八畫通」と非常に精確に書かれている。それは、まるで書道でも習っていたかのように見えるほどで、ポターの線描技術の高さが表れている。この書籍は『諸職畫通』という和装本で、いわゆる百科図鑑のようなものである。こうしたものが、ポター家にあり、ビアトリクスが手にしたというこ

8 Transcribed from her code writings by Leslie Linder, *The Journal of Beatrix Potter 1881-1897* (London: Warne, 1989), p. 210.

9 Leslie Linder, *The Art of Beatrix Potter* (London: Warne, 1978), p. 127.

10 Beatrix Potter: *A Holiday Diary* (London: The Beatrix Potter Society, 1996), p. 40.

とが分かる。¹¹

ここで、ジャポニスムが受け入れられる要因について考察してみる。『ジャポニスム入門』によると、三つの要因があげられるとしている。¹²

まず、第一に、1869年フランスの批評家エルネスト・シェノーが、日本美術の表現上の特色として左右非対称、様式化、豊麗な色彩の三点を挙げていることに触れ、西洋の画家たちには、平面を強調した空間の使い方、片寄りにある思いがけない構図、余計なものを省く単純な構図、輪郭線による形態把握が新鮮に映ったことを理由にあげている。

第二は自然観で、人間中心の世界観が一般的だった西欧において、山水画や自然界の鳥、魚、虫、草花のモチーフにある日本美術の特徴は、自然をとらえる新しい見方をもたらしたとしている。そして、第三には、生活に取り込まれている美のセンスで、日本の実用生活用品、用具が、そのまま優れた芸術品であることに、絵画彫像品が芸術品と考えられていた西欧の人々に新しい眼を開かせることになった。職人によって作られた、一般人の生活用具、陶磁器、漆器、家具調度品などの実用品に芸術的美しさがあった。それは、この当時のアーツ・アンド・クラフツ運動、つまり、生活と芸術を一致させようとするウィリアム・モリス（1834-1896）のデザイン思想に基づいた実践活動に呼応する。以上三つの要因は、そのまま、ビアトリクス・ポターの作品傾向や好みと一致すると考えられる。

次に現在ヴィクトリア・アルバート博物館にある、ポターの所蔵品だった日本製カレンダーについて言及する。約200年近く鎖国していた日本は、1854年開国すると、欧米との交流が盛んになり、英語学習のための教材が求められるようになった。長谷川武次郎は、弘文社という出版社を設立し、日本の昔話を英語教材にして出版したが、それは、西洋に日本の伝統と文化を紹介することになるちりめん本『日本昔噺』シリーズに発展した。ちりめん

11 この「八書通」が『諸職書通』という書籍であることは、宮瀧交二（大東文化大学准教授）の協力によって判明した。

12 ジャポニスム学会編『ジャポニスム入門』思文閣出版、2000年、pp.6-10

という上質な和紙を用い、小泉八雲などの優秀な翻訳者に依頼し、絵師、彫師は、江戸時代からの浮世絵の画法を採用し、国際的に通用する芸術作品として美しい印刷物にこだわり、1885年から次々と出版していった。「桃太郎」「舌切り雀」「猿蟹合戦」などの代表的な日本の昔話20のシリーズである。動物に服を着せる擬人化は、こうした『日本昔噺』シリーズには多く見られ、ポターの作品との一致が見られる。弘文社では、日本文化をテーマにした書籍やカレンダーも出版、輸出しており、現在残されたポターの所蔵品に1904年と1905年のカレンダーがある。四季折々の花鳥や風景の美しい多色版画で作られ、1905年のカレンダーは約12cm×9cmに対し、1904年のカレンダーは、約4.5cm×5.5cmの小さなもので、その保存状態からも、ポターが大事にしていたことが窺われる。その所蔵品の中にちりめん本は残されていないが、持っていた可能性はあるし、ヴィクトリア・アルバート博物館には多くのちりめん本があることやその他でも、目にした可能性は大いにあると思われる。

3 ビアトリクス・ポターの家ヒルトップの中の日本

ビアトリクス・ポターは、ピーターラビットの本やその他数冊の売り上げと伯母の遺産で、湖水地方にあるヒルトップ農場を1905年に購入した。それ以後、両親とロンドンに住みながら、ヒルトップへ頻繁に通い、『こねこのトムのおはなし』『ひげのサムエルのおはなし』など絵本の舞台としても描いた。1913年ウィリアム・ヒーリスと結婚すると、近くのカースルコテッジに住み、ヒルトップは書斎兼仕事場として愛用し、家族や親戚から譲り受けたり、購入した湖水地方の他の農家にあったものを運んできたり、オークションで手に入れたりなどして、お気に入りの家具や陶器などを飾った。ヒルトップに現在置かれているものは、ポターが日用品として使ったものもあるが、その多くは豪華ではないが一風変わった骨董品コレクションである。ほとんどが英国製アンティークだが、インドや中国など東洋の珍しいものも含んでいる中で、現在日本製だと考えられるものは、次の10点である。

玄関広間：まず一点目¹³、¹⁴は、玄関広間に作成年を意味する1667という数字が彫りこまれてある、オーク材の重厚なカップボードの上に、壺などとともに置かれている、蛙のブロンズである。高さ15センチメートルぐらいの擬人化された蛙で、手には巻物を持ち、藁草履をはき、片方は鼻緒がなくなっているが、手紙を急いで届けようとしているような躍動感のあるブロンズである。どこかしら、ジェレミーフィッシャーを彷彿させる。これは、明らかに日本製で、ポター家、父親からの譲渡によるものとして伝えられている。

応接間：第二点目は、パーラー（応接間）にある、箱根の寄木細工で作られたキャビネットである。正面だけではなく、横、上、観音開きを開けた中の引き出しに至るまで、寄木で作られた非常に精巧かつ美しいものである。¹⁵

明治時代、箱根の寄木細工は、ヨーロッパに輸出されていた。そのことは、2011年4月～7月に、たばこと塩の博物館の特別展『華麗なる日本の輸出工芸－世界を驚かせた精美の技』が開かれたが、そこで寄木細工の箆笥や工芸品が展示され、数多く輸出していたことが明らかにされている。また、小田原箱根地方の箱根寄せ木細工や小田原漆器の製造元や問屋の「箱根物産合資会社」の1898年の出納帳によると、出荷額は1年余りで、現在の価値に換算すると約3億円となり、ヨーロッパへの活発な取引が行われていた。¹⁴手に入れた経路は不明だが、ポター家の所蔵品であったと伝えられている。¹⁵

二階の書斎：ニュールームと名付けられた二階の書斎には、壁掛けキャビネットに入った小さな飾り物が多数あり、その中に象牙の他の彫像品に混

13 HIL M 31-Bronze figure of a frog, Images by kind permission of National Trust (図1～10までの写真は、英国ナショナルトラストの許可のもとに掲載している。また、それぞれにつけられている簡単な説明書きは、ヒルトップの資料による。)

14 読売新聞 2010年4月16日付「箱根寄せ木 明治の輸出活況」。2010年、イギリスのテレビのアンティークショーで、同じようなものが出品されていたのを目にしたが、この日本製のキャビネットは、イギリスで人気があったようである。

15 HIL F 1 Inlaid Japanese Cabinet

じって、4点の根付がある。^{16、図7~10}着物にはポケットがないので、お金やたばこや薬などの必需品を入れておく袋や印籠などを帯に吊り下げるときの、留め具として根付は使われ、固い材質の木材や象牙で作られた。初めのうちは実用性が重視されていたが、装飾品や美術品としても作られるようになり、明治時代には輸出用にも作られた。ヴィクトリア・アルバート博物館には、数百の根付が日本セクションにあり、その人気のほどがうかがえる。ヴィクトリア・アルバート博物館の美術工芸展示品に比べると、ポターの所蔵品は、手に取りやすい2~3センチメートルの小物である。

その同じキャビネットに、明らかに日本のものだとわかる二種類の陶器がある。^{17、図11、図12}は表と裏遊女浮世絵が描かれた、直径9センチメートルの杯で、着物には細かい花柄が色彩豊かに描かれている。その裏は、細い竹ひごのようなもので編まれ、補強されているように見えるが、細かい網目模様の美しさを生かしたデザイン目的や保温効果も考えられる。別府の土産として、同様の作りの骨董品、徳利と杯があることから、これも別府である可能性は高い。

第9点目になるのが猿の人形の瀬戸物である。^{18、図13~14}

これは、舌出し三番叟といわれ、歌舞伎舞踊にもあるが、猿が三番叟の装束をつけた立姿の根付で、頭部が差し込み式になっていて、首を振ると口から白い舌が出てくる細工が施されていたものだと思う。その舌は失われているが、後ろにひもを通す穴が二つあり、高さ5~6センチメートルの根付だったことがわかる。ポターが購入した農家にあったものと伝えられてい

16 HIL V 5- Netsuke figure of two men, HIL V6-Netsuke figure of a lion, HIL V7- Netsuke figure of a rabbit, HIL V8-Netsuke figure of a cow and calf

17 HIL C 198a-b- Pair of Japanese tea bowls

18 HIL C 187-glased ceramic figure of a monkey

る。図15は、1994年佐賀県立九州陶磁文化会館にて、『よみがえる江戸の華－くらしのなかのやきもの』特別企画展に出品されたもので、19世紀平戸と記載されている。¹⁹また平戸焼舌出し三番叟は、日本全国郷土玩具バーチャルミュージアム：民芸館：長崎県篇²⁰にもあり、よく似たものが多数みることができることから、平戸焼であることがわかる。

第10点目は、ニュールームの同じキャビネットにある、高さ7cmのデミタスカップで、勇ましい二人の武士と女一人が金箔で描かれているが、作者や窯元の記載はなく、ポターが購入した農家にあったものとされている。²¹、図16～17

図18のデミタスカップは、上のポターのものと比較すると、皿は失われており、柄も異なるが、形状や質感や大きさは全く同じなので、同じ窯元である可能性が高いと思われる。²²それには、「三川内田中造」と記載されている。三川内陶磁器工業組合のオフィシャルサイトでは、技術の粋を極めた細工ものや茶近具が作られ、1800年代半ばから、薄手のコーヒー碗をはじめとする食器はヨーロッパで高い評価を得て、輸出用の洋食器の産地でもあったことが述べられている。²³そのことから、ヒルトップのコーヒーカップは、この三川内焼きであることが濃厚だと考えられる。

二階寝室：二階寝室には、ウィリアム・モリスの花柄の壁紙に合わせるかのように、金箔の黒塗りの家具2点、鏡1点、トレイ1点が置かれている。

19 『よみがえる江戸の華－くらしのなかのやきもの』佐賀県立九州陶磁文化会館、1994年、p.58.

20 <http://www.asahi-net.or.jp/~SA9S-HND/agal-976-32.html> (2013年11月6日)

21 HIL C 190a-c Miniature Chinese cup, cover and saucer これまでは中国製とされていた。

22 作間美智子（東京芸術大学講師）の協力にて入手。その他にも日本製であることの検証に協力いただいたことを感謝したい。

23 みかわち焼き：<http://www.mikawachi-utsuwa.net/links/neo/links/history.php> (2013年11月6日)

それらは、ジャパニングといわれる漆塗りの技法を用いたヨーロッパ製の可能性が高いと考えられるが、金箔黒漆製品について述べておきたい。チャイナが陶器という言葉を表すように、英語で、ジャパンは漆器を表す。そして、中国風の陶器がヨーロッパで作られたことと同様、日本製漆器の模倣品が作られ、その製造方法をジャパニングという。そのことが述べられている 'A treasure of Japanning and Vanishing'²⁴は、1688年イギリスで出版された漆に関する論文で、幾度も復刻されるほど、西洋で読み継がれてきた本である。漆の木はヨーロッパでは生育しなかったもので、その当時ヨーロッパの人たちが日本の黒漆器への憧れを抱き、倣製漆器をどのようにして作りだしたかがその中で明らかにされている。黒漆の面に金粉を蒔き、きらびやかに浮かび上がらせる漆黒と黄金の蒔絵は、桃山時代にはじめて来日したヨーロッパの人々を魅了し、王侯貴族のコレクションとして、重宝されるようになった。こうした日本漆器への憧れから始まったジャパニングは、倣製品が出回るようになった。その本の巻末の図案集には、鳥、花、建物、人物があり、中国を始めとする東洋の模様がある。それは、ポターの4点の所蔵品に描かれているものとよく似た図案が見られることから、ジャパニングと思われる。

第2部

The Tale of Peter Rabbit の日本への受容

1 **The Tale of Peter Rabbit** と『悪戯な小兎』

ここまで、ピエトリクスと日本の関係を記述してきたが、ここからは1902年に英国で出版された**The Tale of Peter Rabbit** は、日本にはどのようにして受容されてきたかを論述することにする。2007年、1906年の「日本農業雑誌」第二巻第三号（読賣新聞社）に『悪戯な小兎』という題名で日本語訳されていたことが国会図書館にて発見された。^{図19-20}この「**The Tale of Peter Rabbit** が

24 ジョン・ストーカー&ジョージ・パーカー著『漆への憧憬-ジャパニングと呼ばれた技法』井谷善恵訳、里文出版、2010年、p.170.

世界で一番最初に翻訳されたのは日本である」というニュースは、日本国内に留まらず（ロイター通信が配信してくれたため）世界各国へのニュースとなった。2007年5月9日の「読売新聞」夕刊では、一面トップ記事として掲載され、その後の後追い記事では、多くの主要新聞やマスメディアによって取り上げられ、英国のBBCテレビ、アメリカのCNNテレビでもこのニュースが放送されたことは「ちょっとした事件」となった。

この「日本農業雑誌」は、日本の農業の発展を目的に、国内はもとより先進国からの先端な農業の情報を紹介しようとする雑誌で、1905年から1922年まで続いた当時の農業雑誌を代表するものであった。最初の号から「田園文学」というコーナーがあり、バイロンの詩やツルネーゲフ、また日本を代表する作家の田山花袋の作品などが掲載されている。この時代の農業雑誌は、世界的に見ても、文学を大切にしていたようである。たとえば、アイルランドの小説家ジェームズ・ジョイスの一番最初の短編小説である「姉妹」が掲載されたのは、1904年発行の「アイリッシュ・ホームステッド」という農業雑誌であった。

発見された『悪戯な小兎』の翻訳には「松川二郎」という名前が記載されているだけで、ビアトリクス・ポターの名前はどこにも明記されていない。テキストに関しては、意識してある部分もあるが、ほぼオリジナルのものを忠実に訳していると言することができる。また本文の中の文字を小さくして「注書き」のように、説明を挿入している部分もある。挿絵は全部で4枚で、これは誰がトレースしたのかは不詳。当然、これは著作権侵害と言えようが、当時の出版状況を考えると、松川二郎自身も、悪意はなかったようである。しかし、彼が、その次の号（第二巻第四号）で*The Tale of Benjamin Bunny*を「悪戯な小兎-後日譚」として取り上げたとき、*The Tale of Peter Rabbit*がかなり忠実に翻訳されているのにたいして、挿絵のない翻案になっていることを考えると、著作権のことを意識した可能性もあろう。

彼は福井県出身の1887年生まれ。ということは、わずか19歳の時に、この翻訳がなされた。その後も彼は「日本農業雑誌」に関わり、新聞記者をしな

がら、積極的に旅行記などを書き、1914年には従軍記者となった。また旅行雑誌社や歴史学会を設立するなど、活発で、幅広い活動を行った人物である。さらに数多くの旅行書の名著も残しているが、彼の生涯が記述されている文献はほとんど見当たらない。

現在までの調査では、松川が関わったビアトリクスの文学は、この二つの物語だけのようである。今後、さまざまな方向から「いったいどのような経緯で、松川が*The Tale of Peter Rabbit* を入手したか？」ということ进行调查するのは、意義ある課題であろう。

巨視的な見方をすると、1902年の日英同盟が締結されてから、日本は英国の文化、文明を貪欲に取り入れようとしていた時期であった。児童文学に限って言えば、1902年に、チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』が日本語に訳されている。また、1898年に出版されたヘレン・バナマンの『ちびくろさんぼ』が日本に紹介されたのは1904年であったし、1865年のルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』の翻案が紹介されたのは、1908年のことだった。

この次に古いとされる*The Tale of Peter Rabbit* の日本語訳は1918年の「子供之友」第五巻七号、八号に掲載されている『ピーターウサギ』である。これは作者、挿絵画家の名前が記載されていないものである。

最後に「ピーターラビットもの」をふたつを書き添えておく。「こどもクラブ」に掲載された「いたずらうさぎのピーター」、第六巻十号、「いたずらうさぎのピーター」第九巻三号である。これらは今年の6月に日本近代文学館にて発見されたものであり、どこにも報告されたことのないものである。²⁵

2 紙芝居の「ピーターラビット」

The Tale of Peter Rabbit の最初の日本語翻訳は、1906年のことだったが、正式に著作権を所有しているフレデリック・ウォーン社から権利を取得して、

25 「こどもクラブ」第六巻十号（1950）には「西山敏夫・文、小坂しげる・え」、「こどもクラブ」第九巻三号（1953）には「河目悌二、千葉省三」と明記されている。

ビートルクスの「小さな本」が日本で出版されたのは、1971年11月1日のことであった。「ピーターラビットの絵本」として『ピーターラビットのおはなし』、『ベンジャミン バニーのおはなし』、『フロブシーのこどもたち』の三冊が同時に出版された。出版社は、日本の児童書出版社を代表する福音館書店、翻訳者は「うさこちゃん」シリーズや『クマのプーさん』の翻訳でも有名な石井桃子。彼女はビートルクスの24冊の絵本のうち、19冊を文意の通りやすい、けっして色褪せない上質な日本語で翻訳した。日本で、とてもビートルクス・ポター・ファンが多いのは、原作の魅力を忠実に日本語に置きかえた彼女の翻訳のすばらしさが大きな一因であることは言うまでもなからう。

1906年から、この1971年の間に、日本では（いわゆる、著作権を取得していない）さまざまな種類の「ピーターラビットのおはなし」が登場してきた。現在、確認できているものは、全部で18の「ピーターラビットもの」がある。一冊の絵本としての『ピーターラビットのおはなし』は11冊、雑誌や物語集のなかに収められているものは6点。また、興味深いものとして、1938年、1954年、1978年に刊行された紙芝居が3点ある。

1938年の全甲社紙芝居刊行會から出版された「ピーターうさぎ」は、「オオカミと子ヤギ」「赤ずきん」「ピノキオ」などに交じって「幼稚園紙芝居シリーズ」のひとつとして登場した。16枚の絵で構成されているこの紙芝居には、ビートルクス・ポターの名前は明記されていない。作者として、紙芝居を幼児教育に取り入れようと努力した「高橋五山」の名前が記載されている。ほとんどオリジナルのテキストに近い翻訳だが、物語は以下のように始まる。

むかし、昔のことでした。あるところに三匹の小さいウサギさんがいました。みんなかわいいうさぎさんでした。ぶち、しろ、それから、ピーターといいました。

その他の日本語訳にも、オリジナルの4匹の子ウサギを5匹に変更しているものがあるが、これは日本語の「四」という数が「死」を意味するという

意味合いからの変更であったと思われる。

もうひとつの紙芝居は、1954年に藤下書房から出版された12枚の絵で構成されている「ぴーたーうさぎ」である。これにもビアトリクス・ポターという名前はどこにも見あたらず、著者はブライアントと書かれている。また1978年には「ぴーたーうさぎ」というタイトルで童心社から刊行されている。その他、最後にこの10月に新たな「ピーターラビットもの」の紙芝居を見つけたことを書き添えておこう。「うさぎのぴーたー」である。^{26、図21}

雑誌や紙芝居等、この種の未確認の「ピーターラビットもの」は他にも埋もれているはずである。今後もそうした資料を発掘したり、ビアトリクス・ポターと日本の関係について、さらに明らかにしてゆくことは必要な作業であろう。

26 紙芝居「うさぎのぴーたー」には「西山敏夫・文、河野きみ・え」と明記されているが、出版年、出版社の記述はない。

参考文献

- 彬子女王「ウィリアム・アンダーソン・コレクション再考」『比較日本学研究センター研究年報』第4号、お茶の水女子大学比較日本学研究センター、2008年
- 小野文子『美の交流：イギリスのジャポニスム』技報堂出版、2008年
- 國雄行『博覧会と明治の日本』吉川弘文館、2010年
- 佐賀県立九州陶磁文化会館『よみがえる江戸の華：くらしのなかのやきものー』佐賀県立九州陶磁文化会館、1994年
- ジャポニスム学会編『ジャポニスム入門』思文閣出版、2000年
- ストーカー、ジョン&ジョージ・パーカー『漆への憧憬－ジャパニングと呼ばれた技法』井谷善恵訳、里文出版、2010年
- 谷川稔他『近代ヨーロッパの情熱と苦悩』中公文庫、2009年
- 鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ』ミネルヴァ、2008年
- Beatrix Potter : *A Holiday Diary* (London : The Beatrix Potter Society, 1996)
- Cortazzi, Hugh *Japan in Late Victorian London : the Japanese native village in Knightsbridge and the Mikado* (London : Sainsbury Institute, 1885)
- Judy Taylor, Joyce Irene Whalley, Anne Stevenson Hobbs and Elizabeth M Battrick, *Beatrix Potter 1866-1943 The Artist and her World* (London : The National Trust and F. Warne Co, 1995)
- Leslie Linder, (Transcribed from her code writings by) *The Journal of Beatrix Potter 1881-1897* (London : F. Warne, 1989)
- Leslie Linder, *The Art of Beatrix Potter* (London : Warne, 1978)
- Susan Denyer, *Beatrix Potter at home in the Lake District* (London : Frances Lincoln and the National Trust, 2000)
- The Beatrix Potter Society, 'The Beatrix Potter Society Newsletter' 116, 2010